
リリカルなのは～漆黒の断罪者～

軍の狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜漆黒の断罪者〜

【Nコード】

N5285J

【作者名】

軍の狗

【あらすじ】

はい、すみませんイガイガです。前作の刻の守護者は諸事情によって削除をせざる得なくなりまして、削除しました。しかしこの作品はそういった事にならない様頑張って書いていきますので宜しくお願いします。本当にすみませんでした。駄文ですが未長くお付き合い戴けます様お願いします。

主人公設定（前書き）

頑張っていきますので感想よろしくお願いします

主人公設定

名前
ジングウジ ナガレ
神宮寺流

年齢

19歳

出身地

第97管理外世界地球
海鳴市

家族構成

父35歳（死去）

母34歳（死去）

妹7歳（死去）

魔導師ランク

AAA（リミッター時）

SS（リミッター解除）

魔力光

漆黑

魔力変換

風

希少スキル

ブラッディーウェポン

階級、所属

特務隊三番隊隊長

時空管理局特務隊三番隊

（特務隊については後に説明）

二つ名

『黒衣の断罪者』

髪色、髪型

ダークブラウン

後ろ髪が肩に掛かるぐらいのサラサラヘア

瞳の色

紅

容姿

中性的で中の上

身長

178?

BJ

漆黒のスーツにロングコートを羽織っている、

その他

魔導師と書類上ではなっているが、実際には騎士

過去に何かがあったため人と接することを嫌うが、根は優しい、罪人を殺すことを躊躇わない（私利私欲で悪事を働く者）

デバイス

『フェンリル』

インテリジェントデバイス

人格

男性（年齢は成人男性位）

待機状態

指輪

起動時

刀型（刃渡り150センチの太刀）

カートリッジシステムは搭載していないかわりにバーストシステムを搭載している（バーストシステムは後に解説）

特務隊とバーストシステムについて

特務隊とは管理局で一般には公開できない様な任務を秘密裏に行う部隊で主な任務は罪人などの抹消、

特務隊の制服は執務官の制服の肩部分と左胸に金色の刺繍があるもので、隊長格の場合ロングコートの着用が義務付けられている

【ロングコートにも同じ刺繍】

バーストシステムとはデバイスに魔力を溜めれば溜めるほど魔法の威力が上がるといふもの、実際に毎日コツコツと溜めていけばカートリッジよりも高威力の物になるが、しかし体の負担もその分増える。

主人公設定（後書き）

駄文ですが頑張りたいと思います

プロローグ（前書き）

二話続けて投稿です

機動六課はJS事件後、正式な部隊になったという設定です。

プロローグ

ミッドチルダの裏路地に何かから逃げる様に走る男がいた。

「ハアハアハア、此処まで来たら流石に追ってこないだろう！まったく管理局も甘いもんだぜ」

男は後ろを向き誰も追って来ない事を確認するとその場に座り込んだ。

『所詮ゴミの考える事など全て同じか……………』

男が急いで横を向くと特務官の制服と漆黒のロングコートに身を包んだ一人の男がいた。

「誰だ！！」

『……………今から死ぬ輩に教える必要は……………ない』

男はそう言つと掌から一振りの真紅の刀を出した。

『フラッシュ・ソート
鮮血の剣』

「テメ……………」

斬

男が何かを言おうとするよりも早く特務官の男が男の首を跳ねて

いた。

男の首からは夥しいほどの血が吹き出し辺り一面の壁や道、特務官の体を真っ赤に染め上げていた。

『……………任務完了』

特務官の男がそう言って血で染まった裏路地から立ち去ろうとすると男の目の前に通信モニターが現れた。

モニターには40歳位のオールバックで無精髭を生やした男が居た。

『……………総隊長どうしました？』

【流、^{ながれ}新しい仕事だ^{にんむ}】

『……………次は何処のゴミを処理したらいいんですか？』

流が無機質な声で聞くと総隊長と呼ばれる男はバツの悪い顔をして答えた。

【次の任務は機動六課のサポートだ】

それを聞いた流は先程の無機質な表情から怒りを表した表情で言った。

『あなたは俺の過去を知りながらも、あそこに行けと？』

【お前の気持ちは分かっているつもりだ、そして過去に何があったのかもな……………】

『だったら何故俺に行かせようとする？確かに俺は管理局の人形だ……だがそれも時と場合による！！それを分かっているこの任務を俺に押し付ける気か？』

流の口調は先程まで使っていた敬語から荒々しいタメ口に変わっていた。

【確かにお前にこの任務を頼むのは間違いだとは思っている、しかし今回は（奴等）が出てくる可能性がある、だからお前に頼むのだ……分かってくれ……流……】

『……』

流は黙って何かを考えていたが、意を決したように口を開き答えた。

『了解した、特務隊三番隊隊長神宮寺流この任務引き受けた』

【そうか引き受けてくれるか、すまないなお前にとってあそこの人達会うのは禁忌というのは理解しているんだけどな……では健闘を祈る】

そう言って総隊長は通信を切り、再び流の周りには静寂が訪れた。

『機動六課か……再びあいつ等と会う事になるうとはな……』

流の後悔とも取れる言葉は風に流され消えていった。

若き殺戮者と若き光達が再び出会う時、時は動き始める。

それは何を示すのかは誰にもワカラナイ。

若者たちが進む道は希望か絶望かそれは時を歩んでいく彼等次第。

リリカルなのは、漆黒の断罪者、始まります

プロローグ（後書き）

感想よろしくお願いします

再会（前書き）

何とか三話目を書き終えました

感想よろしくお願いします。

再会

16:00・機動六課

機動六課の廊下に二人の女性が並んで歩いていた。

1人は栗色の髪の毛をサイドポニーにしている女性、もう一人は美しい金色の髪の毛をロングにしている女性だ。

？「フェイトちゃんは何ではやてちゃんに呼ばれたのか聞いてる？」

サイドポニーの女性がフェイトと呼ばれるロングヘアの女性に尋ねた。

フェイト「うーん、はやてからは新しい人の紹介をしたいから来て欲しいとかしか聞いてないかな、なのは何か聞いてる？」

なのは「いいや、私もフェイトちゃんと一緒だよ？まあ行ったら分かるよね」

そう言っただけなのはとフェイトは部隊長室へと向かった。

15:55・部隊長室

部隊長室には流と茶髪のボブカットの女性が向かい合って話をしていた。

？「けど流くん、ほんまにこの10年前何があったん？無事だったんだったら連絡の一つでもしてくれても良かったんじゃないん？」

皆心配しとったんよ？」

女性が悲しそうな顔をしながら尋ねるが、流はさも当然のように抑揚のない声で答えた。

流『言ったはずですよ八神部隊長、過去の事については一切喋るつもりはないと……そして連絡もする必要がないからしなかったと……』

二人の間に重い空気が流れた。

？「じゃあ何で昔みたいに名前で呼んでくれへんの？それも呼ぶ必要が無いからなん？」

流『分かってるじゃないですか、これ以上話がないようでしたら失礼させて頂きます』

なのは「はやてちゃんいる？」

流がそう言つて部隊長室から出るために踵を返すと部隊長室の扉が開きなのは達が入ってきた。

フェイト「あれ？この人が新しく六課に来た人？」

なのは「えっそうなの？はやてちゃん？」

なのはがそうはやてに尋ねるとはやては齒切れの悪い返事をした。

はやて「う、うん、そうなんよ……（言えへんよ！流君

が新しく来た人やなんて!!」

なのは「？」

なのはは、はやてのそんな返事を聞き少し怪訝な顔をするが、フエイトはそんな事を気にする事もなく自己紹介に入った。

フエイト「私はフエイト・T・ハラOWN階級は執務官あなたは？」

流「……（フエイト、随分と美人になったな）……」

流がそんな事を考えて黙っていると、フエイトは笑顔で流に尋ねた。

フエイト「どうしたの？」

流「……神宮寺流……階級は特務隊三番隊隊長」

なのは・フエイト「えっ!？」

流の名前を聞いた瞬間なのはもフエイトも固まった。

なのは「う……嘘……」

フエイト「本当に……流なの？」

なのはもフェイトも大粒の涙を零しながら流の存在を確かめる。

流『……お久しぶりです、高町一尉、ハラウン執務官』

なのは・フェイト「っっ!!」

流の余りにも無機質で他人行儀な反応になのはもフェイトも息を詰まらせた。

なのは「流君……どうして？昔みたいに名前で呼んでくれないの？」

流『高町一尉……それは八神部隊長にも言いましたが呼ぶ必要が無いから呼ばないだけで……それに、名前で呼び合うのお互いに親しい間柄の人間のはずです』

なのは「だったら!!」

なのはが流に何かを言おうとするが流によって遮られた。

流『勘違いしないでください、高町一尉……貴方の言っている俺は貴方達の前から姿を消した《昔》の神宮寺流であって《今》の神宮寺流では無いんですよ』

なのは「どういこと？」

流『今の俺は管理局の人形であり、特務隊所属の殺戮者です。ここまで言ったら、俺の言いたい事分かりますよね？』

今まで黙って話を聞いていたはやてが答えた。

はやて「つまり、昔の流君と今の流君は全くの別モンで今の流君と私達はもう生きる場所が違うって言いたいんか？だから私達は友達でも仲間でもない私達を名前で呼ばない？」

流『その通りです、それでは失礼させて頂きます』

そう言って流が部屋を出て行こうとすると、フェイトが流の腕を掴んだ。

フェイト「……待って」

流『まだ何かあるんですか？ハラオウン執務官』

フェイトの肩が悲しみで震えていた。

フェイト「……ねえ！！何で！何でなの！？何で……誰にも黙って何処かに行っちゃったの？皆心配してたんだよ？それに何で流が特務隊なんか居るの？」

流『俺の過去については話す気はありません、どうしても知りたければ自分達で調べたらどうですか？それとこれ以上話が無いよう

でしたらもう自分の部屋に戻らせて頂きます』

そう言って流は部屋を出て行った。

部屋に残ったのは三人の悲しみと嗚咽だけだった。

再会（後書き）

駄文にお付き合い戴きましてありがとうございます。

感想等お待ちしております。

後悔と優しさ（前書き）

短いうえに駄文です

後悔と優しさ

17:00 機動六課職員寮【流自室】

俺は俺にあてがわれた部屋のベッドの上で悶々としていた。

流『あいつ等に悪い事をしてしまったな……………』

まるで懺悔でもするかのように俺は呟いた。

そんな独白を聞きの俺の相棒のフェンリルは尋ねてきた。

FR「主よ…………後悔しているのか？」

流『後悔か…………確かに後悔をしているのかもな、』

FR「主よ、主はもう裏の世界に居るべきではない」

流『フェンリル…………お前何を言いたい？』

俺は少し怒気を込めた声で聞いた。

FR「主は優しすぎる…………その優しさゆえに身を滅ぼすかもしれない、だから…………」

流『ふん、前にも言ったはずだ、俺は人殺しだ、そんな奴が今更表の世界に戻るのとは不可能だとな』

FR「だが、主には幸せになる権利がある…………そんな主が幸せになれないのはオカシイ」

そう言ってなのは走るのを止めてしまった。

流『たくつ、ほらよつと!』

そう言って9歳頃の俺は、なのはの所まで戻りをお姫様抱っこをして皆の居る場所に連れて行った。というか昔の俺は随分と大胆だな。

なのは「あ、ありがと／＼／＼・・・けど私重くないかな?」

なのはは耳まで真っ赤になりながらも俺にお礼を言っていた。

流『どういたしまして、ハハッ!なのはもそういうの気にするんだな』

なのは「むうそれってどういう意味かな?」

流『んー?意味はないよ、それになのはみたいな、かわいい子をお姫様抱っこできるなんて俺も役得かな?』

オイオイ、昔の俺はどれだけ非常識なんだよ。

なのは「かつ可愛いって／＼／＼・・・けど何か、はぐらかされた気がする」

アリサ「どうでもいいけどその二人いい加減離れなさい」

すずか「そくだよ二人とも・・・それとなのはちゃん頭冷やそうか?」

・・・・・・・・・・

なのは「あれ？寝てるのかなぁ？」

返事が無いので寝ているのかと考え部屋に入ってみた。

部屋の中は真っ暗で私は明かりをつけた。

なのは「！！何なの？この部屋は！？」

この部屋はベッドと机以外何も無い部屋だった。

まるで人が住んでいないそんな感じ。

何故だか分らないけど流君はいつ死んでもいいように余計なものを一切置いていないようにしている感じがした。

そしてそれがもし本当だと思ってしまいすごく悲しくなった。

なのは「・・・こんな事考えてる場合じゃないよね」

私は流君を探した。

流君はベッドの上で仰向けの状態で寝ていた。

流「スウスウ・・・」

なのは「フフッ、寝顔は昔のまんまだね」

流『……なのは……』

なのは「!!」

今私の名前を？

流『ん……なのは……可愛い子……大丈夫……』

寢言だと分かっている私も私はすごく嬉しくなった。

なのは「フツ可愛いか／＼……、にしてもどんな夢を見
てるのかなあ？」

何だかさっきまでの考えが馬鹿馬鹿しく感じてきた。

きつと流君の根本は昔のままで、只少し不器用になってしまった
だけなのだと、そんなことまで考えてしまうくらいに。

FR「高町嬢よ」

急に流君のデバイスのフェンリルが私に話しかけてきた。

なのは「あつフェンリル久しぶりだね」

FR「高町嬢よ、先程は我が主が失礼をした、しかし主を嫌いに
ならないでくれるか？」

なのは「大丈夫、嫌いにならないよ、けどどうしたの？そんな事
急に……」

FR「主は先程の事を相当悔やんでいた」

なのは「えっ！？それってどういう事？」

FR「主は高町嬢等が自分と関わって傷つかないようにあんな事を言ったのだ、だが自分のその発言で貴女等の心を深く傷つけてしまいその事を悔やんでいる・・・」

私はその話を聞いた瞬間ショックを受けた。

何故自分は流君の心に気が付いてあげる事が出来なかったのかと・・・。

確かに10年も会っていなかったら人の気持ちが分からなくなってしまうのも仕様がなかもしれない。

けど私はそんな自分が許せなかった。

私は只自分は拒絶されたとしか考えられずに本当の意味を知ろうとは思わなかったのだ。

なのは「大丈夫、悪いのは私達の方だから・・・けど、どうして流君は私達を傷つけてしまふと考えてるの？」

FR「それは私の口からは話すことはできないが、過去の出来事の情報が高町嬢のレイジングハートに送ることは可能だ」

なのは「えっそれって本当！？」

FR「ああ、だから主の事をよろしく頼む」

まだった。

なのは「じゃあ行こうか！」

流『何処に行くんですか？高町一尉・・・』

流は先程のミスが無かったかのような感じで尋ねた。

なのは「ん？何処って食堂だよ？」

なのははさも当たり前のように笑顔で答えた。

なのは「それと・・・敬語と名字と階級で呼ぶの禁止ね！」

流『それは最初に言っただけですが？』

そう流が言っただけなのはが頬を膨らませて言った。

なのは「だから命令！」

流『・・・は？』

流はこいつ何言ってるの的な顔でなのはを見る。

なのはは笑顔で再び流に言う。

なのは「だから命令ね」

流は昔からの勘でこれは何を言っても無駄だと考え口調を元に戻して言った。

流『ハア、分かったよ・・・なのは、これでいいのか?』

流の態度に満足したのかなのはは満面の笑みになっていた。

なのは「うん！合格！！じゃあ行こうか」

流『嫌だ』

なのはは流の余りの即答ぶりにびつくりしながら尋ねた。

なのは「何で嫌なのかな?」

流は当たり前のように答えた。

流『人と関わるのが嫌だ』

なのは「却下」

流『ハア！？』

今度は流がなのはの即答に驚いた。

なのは「じゃあ行くよ」

なのはは流の後ろ襟を持って食堂へと向かった。

後悔と優しさ（後書き）

感想お待ちしています

敗北（前書き）

はい、遅くなりすいません言い訳になるのですが理由があります。

理由は自動車学校や就職の説明会等々がありまして書くことができませんでした。本当にスイマセン。

最後になりますがんな駄文にお付き合いいただけたら幸いです。

敗北

機動六課→廊下→

なのはと流は機動六課内にある食堂に向かっていた。

最初はなのはに引き摺られていた流も特務官の制服とそのなのはの行為のせいで目立っていたため嫌々ながらも自分で歩いていた。

なのは「流君ももう少しで食堂に着くからね」

なのはは流に笑顔で言った。

流『なあ、なのは……』

なのは「ん？何？」

流『お前……フェンリルに何を吹き込まれた？』

なのは「えっ」

流の一言で二人の空気は先程までの穏やかな空気から重苦しい空気に変わった。

なのは「なんの事かな？私別にフェンリルに何も吹きこまれてなんかいいよ？」

流『……フン、まあいいけどな……お前らが何を考えてようが俺には

関係の無い事だから……」

この時流の瞳の奥に深い悲しみが見えたのをなのは気が付いていた。

なのは「（流君……何でそこまで自分を押し殺すの？）」「
そしてどうこうしている間に食堂に着いた。」

食堂にはその時間帯ゆえ六課の様々な人が集まっていた。

なのは「うーん、どこの席も空いてないね、どうしようか？」

流『並ぶのが面倒だから俺は自分の部屋に帰らせてもらっぞ？』

なのは「！？ダメダメー！！久しぶりに会ったんだから一緒に食べようよー！！」

流『だけど俺の様な男と一緒に飯を食うと人間性を疑われるぞ？』

なのは「えっ」

流となのはは流の特務官の制服のせいで周りから奇異な目で見られていた。

流『（どこに行っても同じ目で見られるな……なのはに迷惑をかける前に1人になるか……）なのは…悪いが俺は1人で食べさせてもらっぞ』

なのは「あっ待って流君ー！！」

轟

俺は急いでBJを着てプロテクションを張ったが全てを守りきれなかったため頭から血が出てきていた。

流『フェンリル急いで広域索的を！！』

FR〔Yes my master〕

―この感覚嫌な感じがする……まさか…奴か！？！

俺の予感嫌な方で当たってしまった。

？「その必要はないよ 黒衣の断罪者 さん？」

俺の頭上には俺とは対照的な純白のスーツとロングコートを着た長髪の優男がいた。

流『貴様！！何をしに此処に来た！！』

？「なに、たまたまキミの姿が見えたから挨拶がわりに砲撃を撃つただけだけど？」

お気に召さなかったかな？」

流『ふざけるなよ？俺の前に出てくるってことは殺されに来たのか？』

俺は漆黒の魔力と殺気を全身に纏わせフェンリルを構えた。

？「何か勘違いをしてないかい？僕がキミに殺される筈がないだろう…被験体君？」

流『貴様ア！！』

――斬――

俺は目の前の男に漆黒の斬撃を跳ばしたが軽々と避けられた。

流『チッ！ならばフラッディ鮮血ランスの突撃槍』

俺の言葉が合図に幾百の突撃槍が奴に放たれた、普通の人間ならば原型すら留めることがないであろう程の槍は繰返し繰返し奴に放たれた。

？「ふうまだ分からないのかい？キミじゃあ僕は殺せないってことに？」

流『なっ……………』

煙が晴れた先に奴は無傷で立っていた。

？「キミにはもう飽きたから死んでよ」

そう言っ て奴は右手に魔力を集めていった。

そして奴の手から巨大な純白の砲撃が放たれた。

俺は刀で受け流すことも出来たが結界があるとはいえ後ろには六課が在るために受け流すという選択肢を捨てプロテクションに魔力変換の風を付加させ守ることにした。

流『風王壁！！』

？「ハハッ！僕の砲撃をキミが耐えきれるとでも思ってるの？」

流『ぐッ！！クソがアアア！！』

奴の砲撃が俺のプロテクションごと俺を呑み込もうとするが俺はプロテクションに更に魔力を注ぎ込み奴の砲撃を耐え抜いた。

？「へえあれに耐えきるんだ…」

流『ハアハアハア……ぐっ……』

？「けどもう時間だから帰るね？……次に会ったら今度こそキミを殺してあげるよ」

そう言っ て奴は結界と共に姿を消した。そして俺は奴が消えると共に意識を手放した。

敗北（後書き）

早く周りの方々のように上手い文章が作れるようになりたいです。
〔更新速度も含めて〕

最後に感想等々お待ちしております

真実1（前書き）

遅くなつてすいません

（最早言い訳は無用ですかね…）

まあこんな駄文ですが此からもお付き合い戴ければ幸いですw
それではどうぞ

真実1

22:00 医務室

なのはSide

私は今ベッドで寝ている流君の横にいた。流君は先程の結界の中で誰かと闘いそして負けた。私達は結界の外で流君とあの白い服の人を見ていることしか出来なかった……

なのは「……流君…私達は流君の力になれるのかな？」

流『ぐ……あ……ううう……』

なのは「っ流君ー!!」

流『あ……あう……あ』

なのは「流君！流君！」

流『っ………ここは？』

なのは「よかった！目が覚めたんだね！」

流『………なのは……か……』

なのは「流君！大丈夫？痛いところはない？」

流『……………なのは顔が近い…あと体は大丈夫だ』

なのは「あっ／／／……」

けど本当に良かった…血塗れの流君を見た時には私は頭が真っ白になってしまった。かつて自分が空を飛べなくなると言われた…あの時のように……

流『なあ…なのは』

なのは「ん？どうしたの？」

流『フェンリルは何処にいる？』

なのは「フェンリルはデバイスルームで点検した後はやてちゃんが
部隊長室に持っていったけど？」

流『そうか…なあ…なのは、俺を部隊長室に連れていつてくれない
か？…悪いが体が思うように動かないんだ…』

なのは「！？そんなの駄目だよ！流君は全治1ヶ月の大怪我なんだよ！」

流『それでも……早く敵の情報を伝えないといけないだろうが……』

なのは「けど！」

流『……奴等は待ってくれない……だからこそ早く奴等の情報を教えなれないといけない……分かるだろ？』

なのは「っ！……分かった……けど約束して？」

流『何をだ？』

なのは「もう私の前からいなくならないで……………」

そう言って私は流君の服の裾を自然に強く握っていた

流『……………』

なのは「……………」

流『……善処しよう』

なのは「それじゃあ……行こうか……」

私は流君を車椅子に乗せて部隊長室に向かった

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
同時刻 部隊長室

部隊長室にはなのはを除いた隊長、副隊長陣を始めとした前線メンバーとロングアーチが集まっていた

はやて「シャーリーじゃあさっきの結界について分かったことを説明してくれへん？」

シャリオ「はい、先程の結界は普通の結界と同じ効果の他に事象の歪曲といった効果があることが分かりました」

シグナム「待て、事象の歪曲だと！？それは一体……」

シャーリーは眼鏡を指で定位置に直し説明に入った。

シャリオ「事象の歪曲とはあらゆる物事の否定や言葉の通りの事実を歪めるといったものです……神宮寺特務官の攻撃が全く効かなかったのがいい例です」

シャーリーはそう言って先程の流のブラッディランスを喰らって無傷でいるあの男の映像をだした。

フェイト「ちょっと待って！？じゃあ流は何であの砲撃に耐えたの？」

シャリオ「それは……」

シャーリーがフェイトの問いに言い詰まる。

FR「その事については我が話そう……」

はやて「フェンリル……じゃあちよつと説明してくれへん？」

FR「了解した……主は過去に奴等と幾度か闘っているお陰で多少ならあのレアスキルを無力化する術を持っている……只それだけだ……（実際は奴の細胞を植え付けられ同じことが多少はできるだけなのだがな）」

シャリオ「レアスキル！？事象の歪曲は結界の力じゃなくてあの人の力なんですか？」

FR「…ああ」

ティアナ「そんなのって殆ど反則じゃない…」

FR「いや…先程も言ったが対抗策ならある…」

はやて「対抗策？」

FR「ああ…奴のあれは脳の負担が大きくてな一度に頭で処理しきれない程の攻撃を与えれば奴の体にダメージを与えられるし…逆に守る場合も常に相手の攻撃の出力を上回る程のもので守れば問題はない…」

はやて「成る程…で、シャル、流君の怪我はどうなっとるんや？」

シャル「はい、流君の怪我は内蔵の大きなダメージと左腕部が複雑骨折、その他の怪我を合わせて全治1ヶ月の絶対安静です…」

はやて「そうか…分かった、ありがとなシャマル、フェンリル」

スバル「あの…すみません、あの特務官の人とはやてさん達ってどの様なご関係なんですか？」

その瞬間今までの重い空気が更に重くなった

ティアナ「ちよっ！バカスバル！アンタ空気を読みなさいよ！！」

ーゴスン！ー

そう言ってティアナはスバルの頭を思いっきり叩いた

スバル「痛ったあゝ、ティアゝ殴ることないじゃん！」

スバルは頭を押さえティアナに涙目で訴えた

ティアナ「うっさい！バカスバル！！」

スバル「ううう……」

フェイトが悲しい顔でポツポツと話始めた

フェイト「……流はね……私達の大切な……仲間……ううん……大切な人……
だった……」

エリオ「だった？」

はやて「そや、十年振りに再会したのはええんやけど流君に皆拒絶されてもつてな……」

キャロ「……そう……なんですか……」

ヴィータ「昔のアイツはそんな奴じゃなかったんだけどな……」

シグナム「ああ…本当に真っ直ぐな目をしていてな……特務隊なんて入るような奴じゃなかった…」

フェイト「けど流が変わってしまったのにも理由がある筈なんだ…けど流は必要が無いって言って話してくれなかった……」

一同「……………」

カシユー

部隊長室は重苦しい雰囲気包まれ誰一人これ以上話そうとはしなかったが、不意に部隊長室の扉が開いた

流『……はやて…奴等の事について話がある…』

一同「「！」「」

部隊長室に居たメンバーが声がした方向を向くと車椅子に乗った流とそれを押すのが居た

シャマル「ちよつとなのはちゃん！流君は全治一ヶ月の大怪我だから絶対安静って言ったでしょ！なのに何で連れてきたの！？」

シャマルは流を見てなのはに鬼の様な形相で聞いただした。シャマルからしたら絶対安静の患者を此処に連れてくるというのは有り得ない事なのだ

流『……シャマル…それは違うぞ「ちよい待ち！！」……』

はやて「流君今階級じゃなくて名前でうちの事呼ばへんかった？…」

フェイト「……そういえば…」

流『そんな事が…』

フェイト「！！そんな事って！私達には重要な事なの！！」

フェイトは流に物凄い迫力で言い寄った。流の後ろにいたのははフェイトを見て苦笑いをしていた

はやて」で、何で急に敬語をやめたん？」

流はその質問に頭が痛いかのような仕草をとりながら答えた

流『……どこかの一等空尉殿の命令で仕方なく使っているだけだ……』

なのは「にゃはは……」

エリオ「えっ？けど階級では神宮寺特務官の方がなのはさんより階級は上じゃないんですか？」

流「……俺達特務隊は普段は佐官クラスの権限が与えられてるが……他の部署にサポート等で出向になった場合階級は二等陸海空士より更に低い……三等陸海空士の階級になる……」

キヤロ「何でそんなに低くなるんですか？」

流「……それは機密事項だから教えるわけにはいかない……そんな事より奴等の事について話させてほしいんだが……」

流の答えに皆少し落胆するが話が随分と横に脱線をしていたのを思いだし頭を切り替える

はやて「あ、ああそうやったな…で、相手はどんな組織なんや？」

流『まず俺を襲ってきた奴の名前は…カイル…カイル・ハニヴィ…奴は俺の………オリジナルだ』

一同「！？」

なのは「オリジナルってどういう意味なの？」

流『言葉通りの意味だ……俺の体には奴の遺伝子が組み込まれている……まあこれについては後で説明をする……先に進むぞ……』

なのは達は納得をしていないようだったが流は構わずに話を進めた

流『奴が所属している組織の名前は次元広域犯罪組織《アースガルド》……過去の地上本部が生んだ負の遺産だ……』

真実1（後書き）

感想等お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5285j/>

リリカルなのは～漆黒の断罪者～

2011年1月27日02時05分発行